

## 教材研究と教材の扱い方 (4)

——「願はくは花の下にて…」(山家集)・

「箱根路をわれ越え来れば…」(金槐和歌集)——

菅 原 敬 三

### 一

和歌の教材について考えてみたい。教材は、西行法師の「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」(山家集)と源実朝の「箱根路をわれ越え来れば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」(金槐和歌集)である。

和歌を教材とする場合、ほとんどの教材が勅撰集か、私撰集、私家集によっている。そして、歌の配列は部立によるのがほとんどで、部立の中では春・夏・秋・冬・恋・雑の部の歌が多い。また各部からは一首か二首が載録され、広く部を見渡すように載録されている。勅撰集の場合は、それらの歌を味わって、その歌集の特徴を、また、私撰集や私家集の場合は、複数の歌を味わってその時代の歌やその歌集を編纂した歌人の特徴をとらえるようになっていく。

たとえば、明治書院「基本国語Ⅱ新修版」(昭和六十一年版)には、

山家集

西行

花の歌あまた詠みけるに

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ (上春)

月の歌あまた詠みけるに

行くへなく月に心のすみすみて果てはいかにかならむとすらむ (上秋)

冬の歌詠みけるに

寂しさに堪へたる人のまたもあれな庵並べむ冬の山里

(上巻)

## 恋

あはれあはれこの世はよしやさもあらばあれ来む世も  
かくや苦しかるべき(中巻)

とある。四首の歌を味わって、西行の人となり等の特徴をとらえようとするものである。

## 二

西行の歌の中から

花の歌あまた詠みけるに

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のこ  
ろ(上巻)

を取り上げて考えてみたい。和歌の場合、多くの歌は詞書とともに採用されているが、ここに、注意しなければならない点が出てくる。詞書は誰が書いたかということがまず問題になるが、それを追い求めるのが教室の作業になるはずがない。詞書を書いたのが、作者かまた編集した者かに

よって鑑賞や味わいがずいぶん異なってくるが、詞書自体は、作歌の事情や背景をものがたるものであるから、当然歌の解釈に役立つものとして読まざるをえない。しかし、詞書と歌の繋がりに注意して読んでいくと、詞書を検討しなければならぬ場合も多いのである。この西行の歌もそうであろう。

「花の歌あまた詠みけるに」という詞書は、「山家集」によれば、歌数番号の六二から八六までの二十五首の題になっている。従って、「花の歌あまた詠みけるに」という詞書は、「願はくは」の歌だけに付けられた詞書ではなく、二十五首全部にわたっての詞書である。「花の歌あまた詠みけるに」という詞書を、表現面に注目して読むならば、「花」そのものが前面に出てこなければならない。六二から八六までの二十五首の歌の中では、ほとんどの歌が桜を賛美した歌であり、詞書の趣旨によく合ったものであるが、七七の歌は、桜の花そのものを賛美することからはずれている。詞書の趣旨にはずれるものを挙げると、

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のこ  
ろ(77―「山家集」の通し番号、以下同じ)

と、その次の

仏には桜の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば  
(78)

の歌がそれである。しかし、「仏には」の歌に比べると、「願はくは」の歌の方が、「花の歌あまた詠みけるに」の詞書の趣旨からは、もっと遠く隔たっている。「願はくは」の歌は、散文的に表現すれば、『きさらぎの望月のころ花の下にて春死なむ』ことを『願ふ』という意味である。七七の歌のように表現すれば、「願はくは」は自己の願望を強調した倒置法になる。表現の中心は「願はくは花の下にて春死なむ」であり、もっと切り詰めれば「願はくは……春死なむ」である。死への願望が、この歌の中心になる。当然、「きさらぎの望月のころ」と「花の下にて」という条件とが相俟つての「死への願望」ということである。桜の花そのものを多数賛美した後に、桜の花の称賛を盛り込んだ形で粹を広げて詠んだ歌であることをとらえておかなければならぬ。従って、「花の歌あまた詠みけるに」という詞書は、かなりの幅をもって読む必要がある。念のため、『山家集』の中から桜の花を賛美した歌を示しておく、次のような歌である。

吉野山雲をはかりに尋ね入りて心にかけし花を見るかな  
(62)

思ひやる心や花にゆかざらむ霞こめたるみ吉野の山  
(63)

おしなべて花の盛りになりけり山の端ごとにかかる  
白雲 (64)

こういう歌が二十数首並んでいる。「願はくは」の歌が、「花の歌あまた詠みけるに」という詞書の内容とは多少ずれていることは、新古今和歌集のある一本の詞書に、「題知らず」として載っていることでも明らかである。死への願望が詠歌の中心であれば、「花の歌あまた詠みけるに」よりは、「題知らず」の方が詠歌の内容に忠実な形で表現されている。当然、「題知らず」という詞書は、新古今和歌集の編集者の解釈に基づくものであるが、詞書と歌との関係をとらえる上で、詠歌を中心に考えるならば、「題知らず」の方がふさわしいことに、まず注意しておかなければならないであろう。

次に、歌の解釈にもう少し立ち入ってみよう。「願はくは……春死なん」という死への願望の条件として、なぜ西行は「花の下」と「望月の頃」を挙げたのか、「春」に「死」にたいという作者の願望は、「花の下」と「望月の頃」とによってより充実した形で叶えられると我々は読まざるをえない。つまり、「花の下」と「望月の頃」とが並列に並び、また両者が相俟ってはじめて死への至福感が出

てくるというのである。「花の下」で死ぬことが、至福になるためには、西行自身桜を愛好するか、高く称賛する心を持っていなければならぬ。無数にある春の風物の中で、特に桜を取り上げたところに、彼の心を読み取らなければならぬであろう。因みに、『山家集』の中で桜に関する詠歌を調べてみると、「春」の部に際立った特徴が伺える。「春」の部の詠歌百七十三首の中で、百三首の多きを数えている。「春」の部の歌のほぼ六十パーセント（五九・五パーセント）を占めていることになり、ここに西行の際立った嗜好が見てとれよう。試しに、「春」の部の歌の中から「花」に関する歌の詞書を挙げてみると、次のようになる。

待花忘他	56	(歌番号、以下同)
独尋山花	57	
待 花	58	61
花の歌あまたよみけるに	62	86
しづかならんと思ひける頃、花見に人々まうで来たり		
ければ	87、	88
かき絶えこととはずなりける人の、花見に山里へまう		
で来たりと聞きて、よみける		89
花の下にて、月を見てよみける		90
春の曙花見けるに、鶯のなきければ		91

春は花を友といふことを、せか院の齋院にて人々よみけるに	92	
老見花といふことを	93	
ふる木の桜の所々咲きけるを見て	94	
屏風の絵を人々よみけるに、春の宮人群れて花見ける所に、よそなる人の見やりて立てりけるを	95	
山寺の花の盛りなりけるに、昔を思い出でて	96	
修行し侍りけるに、花のおもしろかりける所	97	
熊野へまかりけるに、八上の王子の花面白かりければ、社に書きつけける	98	
せか院の花盛りなりける頃、としたかのもとよりいひ送られける	99	
返 し	100	
上西門院の女房法勝寺の花見侍りけるに、雨の降りて暮れにければ帰られにけり。またの日兵衛の尚の許へ、花のみゆき思い出でさせ給ふらんとおぼえて、かくなん申さまほしかりしとて、遣はしける	101	
返 し	102	
雨の降りけるに、花の下にて車たててながめける人々に	103	
世を遁れて東山に侍りける頃、白川の花ざかりに人さそひければ、まかりて帰りて、昔思い出でて	104	
山路落花	105	

落花の歌あまたよみけるに 106 ~ 135

庭、花似波といふことを 136

白川の花、庭おもしろかりけるを見て 137

高野に籠りたりける頃、草の庵に花の散り積みければ

138

夢中落花といふことを、せか院の齋院にて人々よみけ

るに 139

風前落花 140

雨中落花 141

遠山落花 142

花歌十五首よみけるに 143 ~ 157

散りて後花を思ふといふことを 158

桜以外の素材としては、「鶯」「雁（帰雁）」「蛙」「郭公」

「梅」「柳」「堇」「早蕨」「燕子花」「躑躅」「山吹」等の動

植物、また天象の「霞」等があり、素材的にはかなり幅広

く採用されている。その中で、桜の歌が「春」の部の詠歌

の六十パーセントを占めるというのは、一際目を引くこと

である。桜の美しさを賛美するをが故に、「春死なん」と

いう条件の中で、「花の下」が採用されたのであろう。

もう一つの条件、「そのきさらぎの望月の頃」について、

検討してみよう。一見して気付くことは、「そのきさらぎ

の望月の頃」の「その」という言葉である。「その」とい

う表現には、あることを特定する意味があり、この言葉を使うからには、世間で周知の事実が踏まえられていなければならぬ。世間で周知の事実である「きさらぎの望月の頃」と「その」が結び付いて、「二月十五日」の釈迦入滅の日が浮かび上がってくるのである。仏に帰依していない身でも、「二月十五日」の釈迦入滅の日に臨終を迎えることができたらば、幸せと思うはずである。まして修行の身である作者にとつて、釈迦入滅の日に臨終を迎えることができるならば、これ以上の幸せはないであらう。死ぬ時にはお釈迦さまのもとへと思うのは、修行の身にある人物の言葉にふさわしい。

つまり、この歌は、「願はくは……春死なん」そのための至福の条件として、「花の下」と「きさらぎの望月の頃」が設定されているのである。

この歌の評価については、西行の自歌合である『御裳濯河歌合』に、俊成の判詞がある。七番「月」に関する題で、右の歌「来む世には心のうちにあらはさむ飽かで止みぬる月の光を」と番えられている判詞に、「左の花のもとにてといひ、右の来む世にはと言へる心は共に深きにとりて、右はうちまかせてよろしき歌の体なり。左はねがはくはとおきて、春死なむといへる、麗はしき姿にあらず、この体にとりてかみしも相叶ひていみじく聞こゆるなり、さりとて深く道に入らざらむ輩はかく詠まむとせば、かなはざる

こと有りぬべし。これはいたれる時のことなり。姿相似ざると雖もなずらへて持とす」というものである。歌の主旨である「春死なむ」に対して「麗はしき姿にあらず」、また、詠みぶりに関して「この体にとりてかみしも相叶ひていみじく聞ゆるなり、さりとして深く道に入らざらむ輩はかく詠まむとせば、かなはざること有りぬべし。これはいたれる時のことなり。」という評価は、まさに当を得たもので、教室で扱う場合も注意しておかなければならないものである。また、この歌の詠まれた時期を考えると、二三歳で出家した若年の西行の作と考えるよりも、老境で死を意識し、歌境の円熟した晩年の作とした方がふさわしいように思う。出家当初の若年の修行者が、「花の下にて」とか「春死なん：そのきさらぎの望月の頃」と詠んでいる姿を想像すると、どこか不遜なイメージが浮かび上がってくる。「これはいたれる時のことなり」という俊成の言葉は、この歌の特徴を言い表したものであるとして注意しておかなければならないであろう。

歌の出来栄以上に、この歌を有名にしたのは、西行が二月十六日に臨終を迎えたことであった。一日ずれているとはいっても、歌に願ったごとく「そのきさらぎの望月の頃」の臨終であった。西行には、当時の歌壇とあまり交渉がなかったということがいわれているが、それでも西行の死が当時の貴族にとってはセンセーショナルな出来事とし

て耳目を集めたい。一部を紹介すると、

「文治六年（建久元年・一一九〇）二月十六日未の時円位上人入滅臨終などまことにめでたく存生にふるまひ思はれたりしに更にたがはず末の世に有難きよしなむ申し合ひける。其時詠み置きたりし歌ども思ひ續けて寂蓮入道のもとへ申し伝へし、『君知るや其の如月といひ置きて詞に送る人の後の世』『風に靡く富士の煙にたぐひにし人の行方は空に知られて』『千早振神に手向くる藻塩草かきあつめつつ見るぞかなしき』これは『願はくは花のもとにて春死なむその二月の望月の頃』とよみ置きて、それに違はぬ事を世にもあはれかりけり」（拾玉集（慈鎮）巻五）

などがある。教室でこの歌を扱う場合、右のような資料を示して学習者の興味を喚起するのも、有効な方法であろう。

\*

次に、源実朝の「箱根路をわれ越え来れば伊豆の海や沖の小島に波の寄る身ゆ」について、考察したい。

この歌は、西行の歌と同様に詞書と歌との関係に注意を払う必要があるが、その前に、この歌が詠まれた事情を整

理しておきたい。この歌は、「建暦三年正月（一二一三・実朝二歳）の第三回二所参詣にあたるか」とされる作である。二所詣とは、「伊豆山と箱根の二カ所の権現（仏が仮に神となつて現れたもの）に参詣すること」であり、「鎌倉將軍家の阿権現への崇敬の念は、頼朝以来非常に篤い」とされる（新潮日本古典集成『金槐和歌集』。『金槐和歌集』の中では、「箱根路を」のすぐ前の歌に、

「またの年、二所へ参りたりし時、箱根の御海（芦の湖）を見てよみ侍る歌

たまくしげ箱根のみうみけれあれや二国かけてなかにたゆたう」

という歌があり、両歌は同じ時の作である。

「箱根路を」の歌を解釈する上で、詞書の持つ役割は大きいと言ったが、まず詞書を示してみると、次のようになっている。

「箱根の山をうちいでて見れば、波の寄る小島あり。供の者に、この海の名は知るやと尋ねしかば、伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞きて」

この詞書は一見奇異に感じられる。「箱根路をうちいでて見れば」というのだから、「箱根路を通して見晴らしのい

い所に出てみると」の意味である。見晴らしのいい所からの眺望で、まず目に入ってくるのが「波の寄る小島」であるはずがない。果てしなく広がる「伊豆の海」であるはずだ。それに、「箱根の山をうちいでて見れば、波の寄る小島あり」に続けて、供の者に、「この海の名は知るや」と尋ねるのもおかしい。前文に重ねて読むならば、作者の関心は「波の寄る小島」にあり、その名前を尋ねるのが、道理というものであろう。

しかしながら、このように読むのは、実朝の気持ちにそぐわないような気がする。「箱根の山をうちいでて見れば、波の寄る小島あり」という表現は、「箱根の山をうちいでて見れば、（遙かに広がる海あり、その中に）波の寄る小島あり」と読むべきところであらう。「箱根の山をうちいでて見れば」と「波の寄る小島あり」との間に、大海に見とれている作者の姿があり、大海に見とれている時間的経過を読み取るべきであらう。このように読むならば、詞書は素直に受け取れる。また、詞書と歌との繋がり具合も良くなってくる。作者の心をとらえたものは、大海の広さであり、それとは対照的に沖に浮かぶ小島の存在感であったはずだ。歌の方に視点を移せば、「箱根路をわれ越え来れば伊豆の海や」という上の句の、「箱根路をわれ越え来れば」と「伊豆の海や」との対照が注目される。「箱根路をわれ越え来れば」というリズムはどことなく冗漫であるが、それ

に続く「伊豆の海や」は、一転して引き締まったリズムを生み出している。しかし、これはねらった表現であるとする、「箱根路をわれ越え来れば」という表現からは、「箱根路」の長い道程が読み取れる。だからだと続く「箱根路」に閉口しながら、やっと見晴らしのいい所に出て見ると、目を奪うばかりの大海の眺望が眼前に広がっている。言葉が必要としない作者の感動が「伊豆の海や」という簡潔な表現になり、「や」という感動詞を伴った表現になったのであろう。「や」の裏には眺望のすばらしさとそれに見とれる時間的経過があることを、読み落としてはならないであらう。また、詞書に「供の者にこの海の名は知るやと尋ねしかば」とあるところから見ると、実朝はこの海の名前を知らなかったことになり、はじめて目にする大海の眺望ということになる。本当のことはわからないが、はじめて実朝が伊豆の海を目にしたとする方が、この歌の鑑賞は生きているように思う。

下の句の「沖の小島に波の寄る見ゆ」は、事実を詠んでいるにすぎない。しかし、上の句との対照において、事実が意味を持つてくる。上の句の「面」に対して、下の句の「点」なのである。そして、「見ゆ」というところに、作者の目が自然と「沖の小島」に寄せられていったことが伺える。大海の中の小島、この対照が作者の目を引いたのである。「伊豆の海や」と「沖の小島に波の寄る見ゆ」との

関係は、「面と点」「大と小」との対照である。はじめて見る絶景というものは、実際の景色だけを叙述するだけで、事足りる。こういう実景に実感を盛り込む詠みぶりに、実朝の詠歌の特徴が見てとれよう。しかし、そのすばらしい詠みぶりとは反対に、当時実朝の置かれた政治的状況は、彼の存在の意味すら失われた窮地にあったということが言われているが（新潮日本古典集成『金槐和歌集』）、それを歌の鑑賞の段階に持ち込むのは不要のことであらう。実朝の立場を理解させように試みる場合には、もっと周到な資料等の準備を必要とする。

### 三

和歌（短歌の場合の同様）の教材を扱う場合、内容（作者の気持ちや感動の中心と言い換えられるもの）と表現（表現の工夫）との隔たりを埋めることに苦労する。単なる口語訳では、作者の感動に迫ることはできない。また、作者の感動を教師の側から一方的に説明するのは、学習者をして作者の感動のレベルまで導くことはできない。作者の感動に迫るためには、何が有効に働いているかを見極める必要がある。今回は、詞書と歌との関係に着目させて扱うのがよいものを取り上げた。ここに着目して作成した指導案は、次の通りである。



# 目標

- 1、詞書と歌との関係に着目し、作者の感動に迫る。
- 2、和歌の表現の工夫を味わい、表現の面白さや韻文の修辭法を理解する。

## 指導過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 本時の目標を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 詞書と歌との関係に着目し、作者の感動をとらえること、また、和歌の表現の面白さや韻文の修辭法をとらえることを明示する。</li> <li>・ 詞書と共に、二回通読する。</li> <li>・ 何を詠もうとしたのか、作者の思いをとらえることを念頭におかせる。</li> </ul>
2 西行の歌を読む。	
3 作者の思いをとらえる。	
(1) 「願はくは…春死なん」が歌の中心を成していることをとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「願はくは」は、どこにかかるかから切り込む。</li> <li>・ 作者の思いが、「願はくは…春死なん」という「死への願望」であることをとらえさせる。</li> <li>・ 「花の歌あまた詠みけるに」の詞書と、歌の内容がずれていることをこの段階でおさえておく。</li> </ul>
(2) 「花の下にて」と「そのきさらぎの望月の頃」が、「願はくは…春死なん」とどのような関係にあるかをとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「花の下にて」と「そのきさらぎの望月の頃」が、「願はくは…春死なん」の条件になっていることをとらえさせる。</li> </ul>
(3) 「花の下にて」と「そのきさらぎの望月の頃」が、作者にとってどのような意味があるのか、と	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 沢山の条件の中から、なぜ「花の下にて」と「そのきさらぎの望月の頃」が選ばれたのか、考えさせる。</li> </ul>

らえる。

(ア)「花」に対する作者の思いをとらえる。

(イ)「そのきさらぎの頃」に込められた作者の思いをとらえる。

4 詠歌の時期を考える。

5 作者の死の期日を知る。

6 作者の思いを確認し、通読する。

・「春死なん」の条件になるためには、「花(桜)」が作者にとって称賛の対象でなければならないことをとらえさせる。

・作者が「花」に対して深い愛着の気持ちを持っていたことを、『山家集』の中から桜を称えた歌数首を挙げて示す。

・「その」という表現には、あることを特定する意味があることをとらえさせる。

・「その」と「二月十五日」が結び付いて、特別の意味を持つ「二月十五日」が、釈迦入滅の日であることをとらえさせる。

・「死期」の近付いた頃が、詠歌の時期にふさわしいことをとらえさせる。

・「拾玉集」等の資料を配布し、作者の死が「二月十六日」であることをとらえさせる。

・作者の死が、当時の歌壇に大きなニュースとして受け入れられたことをとらえさせる。

・「願はくは：春死なん」と「花の下にて」「そのきさらぎの望月の頃」との関係に留意させ、作者の感動を実感させる。

# 目標

- 1、詞書と歌との関係に着目し、作者の感動に迫る。
- 2、和歌の表現の工夫を味わい、表現の面白さや韻文の修辭法を理解する。

## 指導過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 本時の目標を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 詞書と歌との関係に着目し、作者の感動をとらえること、また、和歌の表現の面白さや韻文の修辭法をとらえることを明示する。</li> <li>・ 詞書と共に、二回通読する。</li> <li>・ 何を詠もうとしたのか、作者の思いをとらえることを念頭におかせる。</li> <li>・ 三句切れであることをとらえさせる。</li> </ul>
2 実朝の歌を読む。	
3 句切れをつかむ。	
4 上の句に込められた、作者の思いをとらえる。	
(1) 「箱根路をわれ越え来れば」の意味と現地に赴くようになった事情を把握する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「二所詣」での作であること、また鎌倉將軍家にとって「二所詣」は特別の意味があったことを説明する。</li> <li>・ この段階では、「箱根路をわれ越え来れば」の意味を表面者に把握するに止める。</li> <li>・ 詞書から、作者はこの海を見るのがはじめてであることをおさえる。</li> <li>・ 「伊豆の海や」の「や」に注目させ、何に対する感動かとおささせる。</li> </ul>
(2) 「伊豆の海や」に込められた作者の思いをとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「伊豆の海」としか表現していないところから、</li> </ul>

5 詞書と歌にこめられた問題点をとらえる。

6 下の句にこめられた作者の思いをとらえる。

7 作者の思いを確認し、通読する

「伊豆の海」の広がりや眺望の良さ、また海の青さ等々の意見を採用する。

・「箱根路をわれ越え来れば」と「伊豆の海」との対照（字数やリズム）に注目させ、「箱根路をわれ越え来れば」から箱根路の道程の長さを、「伊豆の海や」から眺望の良さを導き出す。

・詞書の「箱根の山をうちいでて見れば、波の寄る小島あり」と上の句の「箱根路をわれ越え来れば伊豆の海や」との間に、意味上の隔たりがあることに注目させ、「箱根の山をうちいでて見れば」と「波の寄る小島あり」との間に（遙かに広がる海あり、その中に）等の表現があることをとらえさせる。

・作者が大海に見とれている時間的経過を読み取らせる。

・「見ゆ」に注目させ、作者の目が自然と「沖の小島」に注がれたことをとらえさせる。

・上の句の「伊豆の海」と下の句の「沖の小島」の対照に注目させ、大景と小景との面白さに作者の目が注がれていることに気付かせる。

・長い道程の後、初めて目にする景色であること、また、大景と小景、面と点の対照等の点に留意させ、作者の感動を実感する。

・事実を詠んでいるにすぎないが、そこに作者の深い感動があることにも注意させる。